9課

11月26日

矛盾する聖句？

安息日午後 11月19日

暗唱聖句

あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。（ヨハネ5：39、新共同訳）

あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。（ヨハネ5：39、口語訳）

今週の聖句

ルカ16：19～31、ルカ23：43、ヨハネ20：17、フィリピ1：21～24、1ペトロ3：13～20、黙示録6：9～11

今週のテーマ

ペトロは、「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい」（1ペト3：15）と警告し、パウロは、「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます」（2テモ4：2、3）と付け加えています。ですから、私たちは、容易に説明できる自分たちの聖書理解と一致している教えだけでなく、自分たちの聖書理解とは異なることを教えている聖句にも目を留める必要があります。

そのような聖句は、私たちはイエスの霊的な模範に倣うべきです。「キリストご自身は、真理の御言葉をひとことも かくさず、いつでも愛をもってそれをお語りになった。……主は、決して不作法だったり、不必要にきびしい言葉を出したり、感じやすい魂に不必要な苦痛を与えたりなどされなかった。主は、人間の弱さを非難されなかった」（『希望への光』851ページ、『各時代の希望』中巻84、85ページ）。

今週私たちは、人々が霊魂の無条件の不死を正当化するために用いる、いくつかの興味深い聖句を学びます。これらの考察は、私たちの確信を強めるものであり、この非常に重要な教えを疑問視する人たちに、親切に応える助けとなるはずです。

日曜日　11 月 20 日　金持ちとラザロ

問1　ルカ 16：19～31 を読んでください。この物語はなぜ字義どおりに死後の世界を描写してはいないのでしょうか。

聖書学者の中には、ルカ16：19～31は、死後の世界の描写として字義通りに理解するべきであると主張する人たちがいます。しかし、そのような理解は聖書的でない結論へと導かれ、これまで学んできた多くの聖句とも矛盾します。

第一に、ここに描かれている天と地獄は、そこにいる者たちが互いに会話ができるほど近いことになります（ルカ16：23～31）。さらに、死んで墓に横たわっている肉体は、「目」と「指」と「舌」を持った意識を持つ霊魂であって、渇きさえ感じることになります（同16：23、24）。

この聖句が人間の死後の状態を描写しているとすれば、救われた者たちは、失われた愛する者たちの、果てしない苦しみを間近に見ながら、彼らと会話さえできるのですから（ルカ16：23～31）、天はもはや、喜びと幸福の場所でなくなることは間違いありません。どうして母親が、地獄で絶え間ない苦痛に苦しむ、愛する我が子を見ながら、自分は幸せでいることができるでしょうか。このような文脈で考えれば、それは事実上、天を描いた、もはや悲しみも嘆きも労苦もない（黙21：4）との神の約束と調和させることは不可能です。

このような矛盾のために、多くの現代の聖書学者は、金持ちとラザロの物語は、細部まで字義どおりに解釈すべきではないたとえであると考えています。ジョージ・E・ラッドはアドベンチストではありませんが、このたとえ話はおそらく、「現在のユダヤ思想を利用したたとえ話であり、人間の死後の状態について何かを教えるためのものではない」（「終末論」『新聖書辞典』388ページ、英文）だろうと述べています。

金持ちとラザロのたとえは、着飾った「金持ち」と「ラザロというできものだらけの貧しい人」（ルカ16：19、20）との対照を鋭く描いています。この物語は、（1）現世の地位や社会的名誉は将来の報いの条件ではないこと、（2）各人の永遠の運命はこの世の生き方によって決まり、それを死後の世界で覆すことはできないこと（同16：25、26）を教えています。

「アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう』」（ルカ 16：31）。この力あるイエスの御言葉から、私たちはどのように、聖書の権威を認め、それに応えるべきでしょうか。

月曜日　11月21日　「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」

聖書の記述で、霊魂不滅を証明するために最も広く用いられている聖句の一つが、ルカ23：43の「するとイエスは、『はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる』と言われた」という聖句です。ほとんどすべての聖書訳が（わずかの例外を除いて）この聖句をほぼ同じ訳文で翻訳しています。つまり、キリストが死んだまさにその日に、キリストと強盗が共に楽園に行くという印象を与えます。それらの翻訳が、霊魂の無条件の不死の教義を信じる聖書学者によるものであることを考えれば驚くには及びません。しかし、これがこの聖句の最良の翻訳なのでしょうか。

問2　ルカ23：43を、ヨハネ20：17、14：1～3と比較してください。この十字架上で悔い改めた強盗に対するイエスの約束は、マグダラのマリアや弟子たちに対するイエスの御言葉に照らして、どのように理解するべきでしょうか。

キリストと強盗が同じ日に楽園（または天国）に行ったとする考えは、復活後にマグダラのマリアに語られたイエスの御言葉と矛盾します。イエスはまだ天の父の御前に行ってはいなかった（ヨハ20：17）のです。イエスと悔い改めた強盗が共に、その日、天に行ったとする誤りは、イエスが弟子たちに語られた再臨の時にのみ天に上げられる（同14：1～3）というイエスの約束とも矛盾します。

ルカ23：43の問題点は、「今日」（ギリシア語で「セーメロン」）という副詞が、後に続く「楽園にいる」にかかるのか、先行する「言っておく」にかかるのか、なのです。ウィルソン・パロスキは、実質的に「文法的見地から」、正しい訳文を決めることは不可能であるとの理解を示しつつ、「しかしながら、ルカによる福音書と使徒言行録中の、20の「今日」（「セーメロン」）のうち14で、ルカはこの副詞を先行する動詞にかけており、そこにはっきりした傾向が見られる」（「ルカ23：43の分析」『ミニストリー』2013年6月号7ページ、英文）と述べています。

それゆえに、ルカ23：43の最も自然な訳文は、「今日、はっきり言っておくが、あなたはわたしと一緒に楽園にいる」であり、この場合、慣用句としての「今日、はっきり言っておく」が、「あなたはわたしと一緒に楽園にいる」という宣言の実際性と厳粛（げんしゅく）さを強調しているわけです。言い換えれば、イエスは彼に、その時、そこで、彼が救われることを約束されたのです。

火曜日　11月22日　この世を去ってキリストと共に

問3　フィリピ1：21～24と1テサロニケ4：13～18を読んでください。パウロはいつ、「キリストと共に」（フィリ1：23）、そして「主と共に」（1テサ4：17）いるようになることを望んでいますか。

パウロは今「キリストに結ばれ」（2コリ5：17）、再臨後には「キリストと共に」（1テサ4：17）生きるという熱い情熱に突き動かされていました。この使徒にとって死でさえも、救い主であり主である方と共にいる確信を断ち切ることはできませんでした。ローマ人への手紙の中で彼が言っているように、「死も、命も、……わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（ロマ8：38、39）。「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」（同14：8）。

この確信を心に、パウロは、すでに「イエスを信じて眠りについた人たち」（1テサ4：14）、そしてキリストの再臨の時に永遠の命を受けるためによみがえる信者たち（1コリ15：16～18、1テサ4：13～18）について語ります。

パウロは、「この世を去って、キリストと共にいたい」（フィリ1：23）との熱い思いを語りましたが、それは死後、肉体を離れて魂が意識だけでキリストと共に生きることを意味したのでしょうか。まったく違います。この聖句の中で、パウロは、現在の悩み多き存在から離れてキリストと共にいたいとの願望を、この二つの出来事の間に起こりうる時差については何も触れずに、言及しているのです。この聖句は、パウロが死んだ時に天に行くことを望んでいたとは教えていません。彼は、再臨の時まで報いを受けることはないと非常に明確に述べています（2テモ4：8）。

要するに、パウロが、「（死んで）この世を去って次に知ることは、死者をよみがえらせるためにキリストが天の雲に乗っておいでになる光景であり、その時『主と共にいる』（1テサ4：17）ことでした。時に、聖書記者たちが、長い期間を隔てるであろう二つの出来事を一緒に言及していることに注意をむけるべきです」（『アンドリュース・スタディー・バイブル』1555ページ、英文）。

しかし、なぜパウロは生きることよりも死ぬことを望んだのでしょうか。それは、〔死ねば〕もはや彼の肉体を苦しめた痛みを感じることもなく（1コリ9：27）、すべての悩みから解放されて休めるからです。さらに、再臨の時に「義の冠」（2テモ4：6～8）を受けるとの揺るがぬ確信を持っていたためなのです。パウロは間違いなく死を望んだのではなく、死の先にあるものを見ていました。

問4　1ペトロ3：13～20を読んでください。キリストはどのように「ノアの時代」の「捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教され」たのでしょうか。（創4：10参照）

霊魂の無条件の不死を信じる注解者たちは、通常、キリストは、まだ墓に眠っている間に「捕らわれた霊たちのところへ行って宣教され」（1ペト3：19）たのだと主張します。彼らは、肉体を離れたキリストの霊が地獄へ行き、ノアの洪水前の肉体を離脱した霊たちに宣教したと考えます。

しかし、死者に第二の救いのチャンスはありません（ヘブ9：27、28）から、この空想的な考えは聖書的に受け入れられるものではありません。そうだとすれば、なぜイエスは救いのチャンスのない者たちに宣教したのでしょうか。

また、最も重要なことは、この理論は、死者は終わりの日の復活まで無意識のままであるという聖書の教え（ヨブ14：10～12、詩編146：4、コヘ9：5、10、1コリ15：16～18、1テサ4：13～15）と矛盾することです。

キリストが、ノアの時代に従わなかった堕落した天使に宣教したと考えるのもばかげています。「獄に捕らわれている霊ども」は、「むかし」従わなかった者どもとして描かれています（1ペト3：19、20、口語訳）が、聖書は、悪天使たちは今日もなお従わない（エフェ6：12、1ペト5：8）と語っています。さらに、堕落した天使たちは、「大いなる日の裁きのために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められ」（ユダ6）ているので救いの機会はありません。

私たちは、1ペトロ3：19の「獄に捕らわれていた霊ども」（口語訳）は、20節の「ノアの時代に……従わなかった者」たちであることに気づくべきです。この聖句に用いられている「霊」（ギリシア語で「プネウマ」）は、新約聖書の至るところ（1コリ16：18、ガラ6：18）に見られるもので、救いの招きを聞いて受け入れることができる、生きている人に対して用いられる言葉です。「獄に」という表現は明らかに字義通りの獄を意味するものではなく、生まれ変わっていない人間の性質に見られる罪の奴隷（ロマ6：1～23、7：7～25）を意味します。

洪水前の頑迷な人々へのキリストの宣教は、神によって導かれ、その時代の人々に「義の宣伝者」（2ペト2：5、口語訳）となったノアを通して達成されました（ヘブ11：7）。ペトロの手紙のこの聖句は、善を行って苦しむという文脈で書かれているのであって、死者の状態についての注解ではありません。

木曜日　11 月 24 日　　祭壇の下の魂

問5　黙示録 6：9～11 を読んでください。殉教者の「魂」がどのようにして「祭壇の下」から叫ぶのでしょうか。

黙示録の第五の封印が開かれると、初めに奇妙な場面が啓示されます。殉教者たちの魂が、隠喩的に「祭壇の下」から神に復讐（ふくしゅう）を求める情景が描かれています（黙6：9～11）。ある注解者は、この「祭壇」は、第七の封印の記事にある香の祭壇であると考えます（同8：1～6）。しかし、黙示録6：9～11にある（香ではなく）「血」という言葉は、犠牲の血が注ぎかけられた（レビ4：18、30、34）燔祭のための祭壇を連想させます。犠牲の血が祭壇のまわりにまかれたように、殉教者たちの血が、象徴的に神の祭壇にまかれたのです。それは彼らが神の御言葉に忠実であり、イエスの証人であり続けたために（黙6：9、12：17、14：12）、命を失ったことを意味します。

祭壇の下の「魂」もまた象徴的です。これを字義通りに読めば、殉教者たちはまだ復讐を求めて叫んでいることになり、天で幸せに暮らしてはおらず、救いの報いを楽しんでいるとは思えません。

さらに、重要なことは、ヨハネは実際の天の様子を見せられてはいないということです。「そこには武装した騎手を乗せた白い馬も、赤い馬も、黒い馬も、青白い馬もいない。そこにイエスは、ナイフで傷つき血を流す小羊の姿では現れない。四つの獣は、実際に動物の特徴を持った翼のある生き物の姿をしてはいない。……同様に、天の祭壇の下に『魂』はいないのである。この情景全体は、絵画的、象徴的表現である」（『SDA 聖書注解』第7巻778ページ、英文）。

再び、ジョージ・E・ラッドは次のように書いています。「このたとえ〔黙6：9～11〕の中の祭壇は、明らかに犠牲の血が注がれた犠牲の祭壇である。ヨハネが、『祭壇の下に』殉教者たちの魂を見たという事実は、死後の状態、あるいは彼らが〔生と死の〕中間の状態にあることを意味するものではない。それは単に、彼らが神の御名のもとに殉教した事実を生き生きと描く一手段にすぎない」（『ヨハネの黙示録注解』103ページ、英文）。

まだ実現していない正義を叫び求めない者（特に不正のために犠牲となった者）がいるでしょうか。私たちはなぜ、信仰によって、究極の意味においてこの地上には存在しない正義が必ず実現すると信じなければならないのでしょうか。このすばらしい約束はあなたにとって、どんな慰めとなりますか。

金曜日　11月25日　さらなる研究

参考資料として、『キリストの実物教訓』第21章「大きな淵がおいてあって」、『各時代の希望』第78章「カルバリー」を読んでください。

「キリストは、金持ちとラザロのたとえをお語りになって、人々が自己の永遠の運命を決定するのは、この世の生涯においてであることをお示しになった。恩恵の期間の間は、神の恵みがすべての人々に与えられている。しかし、もし人々がその機会を自己満足のために逃してしまうならば、彼らは自分を永遠の命から切り離してしまうのである。その後にはもはや恩恵の期間は与えられないのである。自分の選択によって、彼らは自分たちと神との間に越えることのできない淵をつくってしまうのである」(『希望への光』1285ページ、『キリストの実物教訓』235ページ)。

「それらの初期のクリスチャンたちが、山や荒れ野に追放されたとき、飢えと寒さと拷問によって死ぬために地下牢に取り残されたとき、殉教が唯一苦痛から逃れる道であると思えたとき、彼らは、彼らのために十字架に架かられたキリストのゆえに苦しむに値する者と数えられることを喜んだ。彼らの尊い模範は、かつてないほどの悩みの時に入ろうとする神の民にとって慰めと励ましとなるだろう」(『教会への証』第5巻213ページ、英文)。

話し合いのための質問

❶ **聖書全体を貫く視点から人間の性質を見ることは、私たちが今週学んだ聖句を正しく理解するために、どのように助けとなりますか。クリスチャン殉教者たちの「断固たる」信仰と今の世代の「柔軟な」信仰の違いは何でしょうか。言い換えれば、人は何のためであれば死ねるのでしょうか。**

❷ **すべての真理は単に相対的、文化的なものであると考える人が、そのような真理のために死ねるでしょうか。同時に、私たちは誤った主義だと考える原因のために死ぬことを厭(いと)わなかった人たちから何を学ぶことができるでしょうか。**

❸ **金持ちとラザロのたとえ話についてさらに考えてみましょう。イエスが死からよみがえられたとき、多くの者が彼を信じました。しかしやはり多くの者が、同じ証拠を目にしながら信じませんでした。このことは、真理に対して人間の心がどれほど頑なであるかについて教えています。そのような頑なさに陥らないためにはどうすれば良いでしょうか。**